

## 地域社会を牽引する グローバルリーダーの育成を目指す 地方私立大学の改革

( 共愛学園前橋国際大学 ● グローバルプロジェクト )

地方の小規模単科大学ながら、文部科学省の複数の支援事業に採択され、各種大学ランキングの上位にも名を連ねる共愛学園前橋国際大学。2012年度から「グローバル人材育成支援事業(GGJ)」、14年度から「地(知)の拠点整備事業(COC)」に採択され、地域社会を牽引する「グローバルリーダー」の育成に力を入れている。地域に根差したグローバル教育を通して、どのような人材を育てようとしているのか。そして、そのために教育の質をどう保証するのか。地方私立大学の未来を先取りする取り組みをレポートする。

### 地域で働きながら世界ともつながれる人材を育成

地方創生時代にあって注目されているのが「グローバル」だ。地域に根差しながら、地域と世界をつなぎ、海外の活力を地域に取り込み、地域を活性化させていく——そうしたグローバル人材の育成に力を入れているのが、群馬県前橋市の郊外にある共愛学園前橋国際大学である。

同大学は、学生数約1000人の単科大学で、1999年、短期大学を4年制大学に改組し、日本初の国際社会学部を設置して以来、国際的な視野を持ちながら地域の諸課題を解決できる人材を育成してきた。12年度「グローバル人材育成支援事業(GGJ)」、14年度「地(知)の拠点整備事業(COC)」、15年度「大学教育再生加速プログラム(AP)」、さらに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」と、文部科学省の支援事業に採択され、地方創生や学修質保証システムの構築など、様々な取り組みを拡充させている。

16年度に最終年度を迎えたGGJでは、育成を目指す人材像に「次世



共愛学園前橋国際大学学長  
**大森昭生** おおもり・あきお  
国際社会学部長、副学長などを経  
て、2016年から現職。

代の地域社会を牽引する「グローバルリーダー」を掲げ、群馬に本社を置くグローバル企業のサンデンホールディングス株式会社(以下、サンデン)や伊勢崎市教育委員会などと連携して事業を進めている。同大学が地域人材の育成に力を入れる背景には、群馬の地域性が大きいと、大森昭生学長は語る。

「群馬県は、第2次産業の比率が他県に比べて高い、ものづくりの県です。加えて、農業も主要産業の1つであり、いずれもグローバル化が進む中で岐路に立たされています。時代のうねりの中で、これからの群馬を担う人材が、国内のことしか知らず、群馬の中だけで生きていくという考えでは、地域の発展は望めません。群馬に限らず、それぞれの出身地域で暮らし、一生懸命働きながら世界とのつながりを築けるような人

材が、地方にこそ求められているのです」

群馬県は外国人住民比率が全国6位で、児童の1割以上が外国籍という小学校もある。そうした「生活の

## 学年を超えてチームを組み、様々な課題解決に挑む

同大学では、グローバルリーダーに必要とされる資質を次の3つに定義した。

- ①英語を中心とした外国語によるコミュニケーション能力
  - ②主体性・積極性・チャレンジ精神・協調性・柔軟性・責任感・使命感
  - ③異文化に対する理解と地域人としてのアイデンティティ
- それらの資質を備えた人材を育成するために進めているのが、「Kyoyai

グローバル化」は、今後、全国の地方都市で加速すると予測されており、多文化共生の面でもグローバルな体験が必要不可欠だと考え、教育活動を行っている。

「Global Project」だ。課題解決型学習や高度な語学教育を基盤として、世界や地域とのつながりの中で学びを深めていくプログラムだ。

その柱となる取り組みは、どの学生も履修できる「Global Career Training 副専攻」だ。「語学」「理論・スキル」「実践」の3要素から成り、インターネットを使った1対1の英語トレーニング、英語によるディスカッションを通してビジネスやリーダーシップについて学ぶ科目、企業や地域との連携による体験型プログラムなどが設けられている。

そして、それらを支える教育として、主体性や協調性を育むアクティブ・ラーニングを全科目の75%の授業で取り入れ、国際交流を推進するための留学プログラムも多数用

図1 「Global Project Work」の活動例

プログラム	概要
アメリカ研修サポートインターン	伊勢崎市の中学生の海外研修（ミズーリ州立大学・サンデントロイト工場）の引率支援をする。
アジア圏でのミッションコンプリート研修	アジア圏のサンデン現地法人を拠点に、現地において様々なビジネス・ミッションに取り組む。
児童向けグローバル教育ワークショップ	学生、サンデン社員、伊勢崎市教育委員会の協働プロジェクト。伊勢崎市内の小学生が参加するワークショップを企画・運営、コーディネートする。
アジア異文化研修	初めて海外を体験する学生向け。サンデン現地法人訪問、大学生や高校生との交流やボランティア活動を通して異文化を体験。

\* 同大学の資料を基に編集部で作成



写真1 2016年度「児童向けグローバル教育ワークショップ」の様子。小学校14校の6年生38人が参加し、外国について学べるゲームやクイズなどを楽しんだ。

## 地域の子どもたちに夢を与えられた喜び

意されている。さらに、ディスカッションや発表の準備などが行いやすいように設計された校舎「KYOAI COMMONS」もある。

学生が大きな成長を見せるのが、「Global Career Training 副専攻」の中の「Global Project Work」(図1)だ。例えば、「児童向けグローバル教育ワークショップ」では、夏休みの

2日間、伊勢崎市内の小学生を対象に海外を身近に感じてもらうワークショップを開く。企画・運営を担当するのは、希望者で結成されたプロ

ジェクトチームだ。2年生の時に参加した児童教育コース(小学校教員養成課程)3年の中里美穂さんは、当日、子どもに提示するミッション内容の企画を担当した。

「昨年は2年生2人、3年生4人のチームでしたが、2年生だからといって先輩に頼ればよいという気持ちはありませんでした。子どもたちに英語に興味を持ってもらうためにはどうすればいいのか、悩みながら準備を進めました」

15年度は小学校15校から6年生29人が参加し、クイズや海外旅行プランの作成などを行った。楽しそうに活動する子どもたちの姿に大きな達



共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科1年  
**堀本佳道** ほりもと・よしみち  
英語コース所属。群馬県立太田東高校卒業。



共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科3年  
**中里美穂** なかざと・みほ  
児童教育コース所属。群馬県立前橋商業高校卒業。

成感を得た中里さん。後日、参加者の1人が英語に興味を持ち、「将来は英語の先生になりたい」と言ってきたことに喜びを感じたという。

「私がかかわった活動で子どもたちが夢を与えることができたのが、何よりうれしかったです。将来は小学校の先生になり、世界で活躍できる子どもたちを育てたいという思いがより一層強くなりました」(中里さん)

## 社会人として必要な力を学んだ海外研修

一方、学生に「地獄の研修」と呼ばれる「ミッションコンプリート研修」で徹底的に鍛えられたのが、英語コース4年の堀本佳道さんだ。タイに2週間滞在し、サンデンの現地法人から課されるミッションに取り組み課題解決型研修である。毎朝9時にミッションが発令され、午後3時までグループで解決しなければならぬ。加えて、日本出発前に提示されたファイナルミッションも並行して進める。

毎日のミッションは、「タイ語での自己紹介」に始まり、「現地ブランドの販売戦略」「現地のラーメン店のプ



写真2 2016年3月に行われた「ミッションコンプリート研修」で、ミッション達成のため、観光客にヒアリング調査を行う様子。ミッションのプレッシャーから、自ら話さざるを得ない。

ロモーション」など、徐々にレベルが上がっていく。ファイナルミッションは、「日本の自動販売機をタイで展開するための戦略」だった(写真2)。「内容的にも時間的にも厳しいミッションだった上に、自分の英語が現地の人に通じず、とにかく大変でした。日本に帰りたいと何度も思いましたが、自分はチームのリーダーで、メンバーの中では一番英語が話せました。自分がやらなければならぬという責任感から自分を鼓舞して、ミッションをやり遂げました。最後に、現地企業の社長から『自社で提案してほしい』という言葉が報われた思いでした」(堀本さん)

堀本さんは、「社会人としてどのよ

図2 「共愛12の力」

軸	12の力	力の定義
識見	共生のための知識	多様な存在が共生し続けることができる社会を築いていくために必要な知識
	共生のための態度	多様な存在が共生し続けることを尊重する考えや行動
	グローバル・マインド	地域社会と国際社会のかかわりを捉え、両者をつなぐことで、地域社会の発展に貢献する姿勢
自律する力	自己を理解する力	自己の特徴、強みや弱み、成長を正確に理解する力
	自己を制御する力	ストレスや感情の揺れ動きに対処しながら、学びや課題に持続して取り組む力
	主体性	人からの指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけ、行動する力
コミュニケーション力	伝え合う力	コミュニケーションにおいて、相手の意図を正しく理解し、自分の意図を効果的に伝達する力
	協働する力	ほかのメンバーと協調しながら集団として目標に向けて行動する力
	関係を構築する力	様々な他者と円滑な関係を築く力
問題に対応する力	分析し、思考する力	様々な情報を収集、分析し、論理的に思考して課題を発見する力
	構想し、実行する力	課題に対応するための計画を立て、実行する力
	実践的スキル	現代社会において、必要な基本的スキルと自らの強みとなる実践的スキル

\*同大学の資料を基に編集部で作成

うな力が必要なのかも、この研修を通して学ぶことができた」と語る。メンバーそれぞれの強みを生かしてミッションをやり遂げるチームワーク、企画立案のための情報収集能力、的確に表現するプレゼンテーション能力、交渉を円滑に進めるためのコミュニケーション能力やネゴシエーション能力などが、ミッションに取り組み過程で鍛えられていく。

「この研修では、英語コース、国際コース、情報・経営コースなどの学生が混合でチームを組めます。英語

ができなくても、ビジネスや会計の知識など自分の強みを生かしてチームに貢献できるかが重要なのです。グローバルな舞台でも臆することなく、課題解決に向けてそれぞれの力を発揮しながらチーム・ビルディングができるかどうか。地方のグローバル人材に必要なのは、そのような力ではないでしょうか」(大森学長)

## 身につけた力をeポートフォリオで可視化

学生の成長を可視化するために、



同大学では、卒業時まで身に付けたい力として「共愛12の力」(図2)とルーブリックを設定。学生は年度ごとにそれぞれの力がどのレベルに達しているのかを、コースの担当教員と相談しながら自己評価する。その内容は、eポートフォリオシステム「Kyoai Career Gate」の個人ページに、履修科目や海外・地域での経験、ボランティア、アルバイトなどとともに蓄積され、どの取り組みがどの力を伸ばすことにつながったのかが一目で分かるようになっていく。

「私たちが育てたいのは、自律した学習者です。そのためには、学生が自分の言葉で自分自身の成長を語れなければなりません。『Kyoai Career Gate』では、『この力がついたら海外研修でこういう経験をしたから』というように、プログラムの内容と身につけた力が関連づけて示されるようなシステムになっています。学生が自分の成長を実感できるとともに、自分に足りない力を考えて、履修科目や体験プログラムを選択することも可能になりました」(大森学長)

「Kyoai Career Gate」には、全国に先駆けて、学生が自身の活動履歴

を外部に公開する「ショーケース」(公開履歴書)の機能も備えた。就職活動では、そのURLを企業の採用担当に伝えれば、「Kyoai Career Gate」に蓄積された在学中の活動や成長をアピールできる。また、出身高校に公開すれば、高校側は卒業生の成長や活躍を把握できる。

## 「自分を成長させる糧」を自らつかみ取る

同大学の学生は、45%が海外留学制度を利用し、90%以上がキャンパス内外で展開されるアクティブラーニングを経験する。学生はなぜ様々な活動に挑戦するのか。学生が皆、指摘するのは、周囲からの刺激だ。

「目的意識が高い友人がたくさんいることが大きいと思います。誰々がボランティアをしている、資格試験の準備を始めたといった話を聞くと、自分も負けていられないという気持ちをかき立てられます」(中里さん)

「この大学に入って、どのような経験をするかが重要だと思うようになりました。周りに負けたくないという思いが強く、様々なプログラムに

「本学の教育を高校現場にアピールするだけでなく、大学教育の現状を知ってもらい、高校と大学が互いに刺激し合って教育を変えていきたいと考えています。『ショーケース』は大学と産業界、高校教育との接続で大きな効果を発揮するでしょう」(大森学長)

挑戦しました。留学制度や体験型の研修以外にも、大学にはコンテストやボランティア、オープンキャンパス、地域におけるサービスラーニングなど、学生主体で取り組むプログラムがたくさんあります。意欲のある学生が力を発揮できる場があることが、自分を大きく成長させてくれるのだと思います」(堀本さん)

「グローバル人材の育成」という大学のミッションは、具現化しつつある。卒業生の中には、地元企業の海外関連の部署で活躍する者、一度は他県で就職したが、地元の発展のために群馬県に帰ってくる者が増えている。また、新入社員でグローバル

推進プロジェクトに抜擢された卒業生や、「ミッションコンプリート研修」で課題を解決できなかった悔しさをばねに、帰国後、ビジネスコンテストに参加して大学生部門賞を受賞し、在学中に起業した学生もいる。

もちろん、プログラムに挑戦するかどうかは、学生のやる気次第だ。

「連携する県内の高校の先生から言われた言葉を借りれば、学生には『自分を成長させる糧をつかみ取る力』を身につけてほしいと思っています。

大学では、自ら挑戦する姿勢が求められますが、積極的に挑戦する学生と受け身の学生の間には『チャレンジ格差』が生じてしまいます。高校時代から様々な経験を積み重ねておくことで、チャレンジ精神を培っておいてほしいと思います」(大森学長)

高校時代に主体的な学びを経験した学生は、1年次から様々なプログラムに積極的に参加するという。多くの大学が、学生の意欲に応えるためのプログラムを用意している。あとは学生自身がそれをいかに利用できるかだ。高校時代の学びのあり方が、大学でのさらなる成長に大きく関係しているのかもしれない。